

## あなたのスキルは社会に役立つ

2011年3月11日の東日本大震災発生直後に発足したHack For Japanと「市民が主体となって自分たちの街の課題を技術で解決するコミュニティ作り支援」を掲げるCode for Japanのメンバーから、防災や減災、地域の活性化や課題解決、そして人材育成など、「エンジニアができる社会貢献」をテーマにした記事をお届けします。

### 第100回

## 「ナブかつLAB」が実践する、地域に根ざしたIT教育

●Hack For Japan  
清水 俊之介(しみず しゅんのすけ)

今回は2019年11月から始まったイトナブの新しい取り組み「ナブかつLAB」についてレポートします！話を聞いていく中でこれからのプログラミング教育に大切なものが見えてきました。

### 「ナブかつLAB」が 福島県郡山市でスタート

この連載で何度も取り上げている「イトナブ<sup>注1</sup>」が2019年11月より新たなプロジェクトを開始しました。その名も「ナブかつLAB」(図1)。このプロジェクトでは「地域企業」「行政」「地域のエンジニア」、そして「イトナブ」の4者でチームを組み、地域のプログラミング教育の底上げをすることを目指しています。

イトナブ代表の古山隆幸さんは「やっぱり地域の大人が、地域の若者を育てるしくみを全国の地域に作りたい。それができあがると、若者たちはどの地

域でも格差がないプログラミング教育を学べると思っている」と語ります。同じく昨年の11月に行われた「DevFest 東北 2019 in 郡山」で古山さんが登壇した際にも、地方では産業が固定化され、IT人材が新たな産業を産み出していくという重要性が理解されていないということ、そしてそれぞれの地域でコミュニティを作りITの重要性を伝えていくことが重要だということをお話していました。

そんな思いを持ったイトナブの取り組みの1つとして、福島県郡山市でナブかつLABがスタートしました。2019年12月14、15日の2日間に渡って開催された初心者向けの集中講義を終え、今年1月からは月2回のプログラミング講座が開催されています。筆者も活動に共感し、郡山市に拠点を持つ株式会社dottのエンジニアとして、地域のIT分野を育てていくために講師として参加しています。

### 福島機会は東京の1/167?

活動についてレポートをする前に、背景として実際にどのような格差があるのかということを見てみたいと思います。感覚として「地方と都市のプログラミング教育に格差がありそうだ」ということは想像に難くないと思いますから、今回は実際のデータを参考に現状を調査しました。都市部でのIT系の勉強会の開催数と東北の状況を比較してみたのが表1です。結果からは勉強会の開催数<sup>注2</sup>では東京が

注1 「石巻から1000人のエンジニアを育成」をテーマに震災復興とともに発足した団体。

▼図1 ナブかつLAB郡山のロゴ



注2 2020年2月4日時点での、connpass上における勉強会の登録数。





## ナブかつLAB 運営メンバー紹介



### 加藤 奨人 (UK)

一般社団法人イトナブ石巻  
ディレクター、1992年生まれ、  
岐阜県土岐(とき)市出身。

大学入学を機に上京。東日本  
大震災のボランティアで石巻  
に訪れたことがきっかけでイ  
トナブと出会う。大学生時代  
にインターン生として2年間  
東京から石巻に移住をしプロ  
グラミングを学びながら教育関連のイベントやハッカソンの  
企画、運営に従事。大学卒業後2017年からイトナブに正式  
に入社し石巻、郡山、横須賀などを中心にプログラミング教  
育事業の企画、運営に携わっている。



### 武山 将己 (日の出)

一般社団法人イトナブ石巻  
教育部、1986年生まれ、宮城  
県石巻市出身。

高校卒業後は東京の大学へ進  
学し、もともと夢だった漫画  
を描き始める。編集者に心を  
折られてデジタルのイラスト  
へ転向したときに東日本大震  
災が起き、2014年に石巻に帰  
郷、イトナブ石巻に入社。イラストレーターの仕事も行いつ  
つ、おもに高校生から社会人にプログラミングを教える活動  
をしている。現在はナブかつLABのサポート、高校の部活  
動での外部講師、ゲーム専門学校のUnity講師や教材開発な  
どを行っている。

を通じてさまざまな学生たちと関わる中で「プログラ  
ミングを始めてみたかったけど、どうやればいい  
のかわからないし、質問できる場所がなかった」と  
いう声を何度も聞いたそうです。武山さんは普段も  
石巻の高校の部活動で講師をしたり、専門学校では  
Unityの講師をしたりと教育の最前線で活躍してい  
ます。2人には個別に話を伺っていたのですが、加  
藤さんは当事者として地方部でのプログラミングを  
学ぶ機会の少なさを指摘し、武山さんは教育の現場  
の中でそのことを同じように実感していました。

加藤さんはイトナブを中心としたプログラミング  
学習の環境の中で、学生がスキルを身に付け自分の  
作りたいものを実現している姿を多く見てきまし  
た。それをほかの地域でも展開していくことで、多  
くの若者にとってすばらしい場を提供できると考え  
ています。2人から話を聞いている中で興味を持っ  
たのが「楽しい」というキーワード。武山さんは自身  
が教えてきた学生から「初めてちゃんとしたプログ

ラミングを体験できて良かった」「楽しかった」とい  
う感想を聞いたことがきっかけで、より一層「育成」  
という分野に力を注ぐようになりました。加藤さん  
も「楽しい！可能性が広がるんだ！ということをも  
1人でも多くの学生に体験してもらいたい」と話し  
ます。

この「楽しい」という言葉は、外からイトナブの活  
動を見ている中でいつも強く伝わってくるメッセー  
ジです。だからこそ応援したくなりますし、イトナ  
ブの周りには学ぼうとする熱意のある人たちが引き  
寄せられているのだと思います。「プログラミング  
はこれから小学校教育でも採用されていくけど何を  
やらせればいいのか」とか「アルゴリズムって言われて  
もピンとこない。そういうことを事前に学ばせたほ  
うが良いのか」ということを筆者の周りの大人たち  
から聞かれることも多くなりましたが、何よりもま  
ず「楽しい」ということを子どもたちに経験してもら  
うのが大事なんだということ、イトナブのメン  
バーや学生たちから学ばせてもらっています。

## イトナブが持つ教育のノウハウ

筆者がナブかつLABに地域のエンジニア講師と  
して参加することになり、計画を進めていく中であ  
る課題に直面しました。普段GDG<sup>注5</sup>のオーガナイ  
ザーとしてハンズオン形式のイベントを開催してい  
ますが、参加するのはすでにエンジニアとして仕事  
をしている方や情報系の学科に所属する大学生が多  
く、会社でもコミュニティでも、完全な初心者に0  
からプログラミングを教えるという機会が少なく  
なっていました。そのため、最初の集中講義の前には  
「HTMLの書き方はどれくらい難しいと感じるの  
だろうか?」「JavaScript(JS)はデータ型から教え  
ればいいのか?」「Angularとかフレームワークを最  
初からやったほうが意外と楽なのでは?」などと、  
どのようなことを教えればいいのかまったくわから  
ない状態でした。

そんな状況に陥っていたとき、武山さんが作成

注5 Googleのテクノロジーをメインに取り扱う開発者コミュニ  
ティ、Google Developers Groupのこと。

## 「ナブかつLAB」が実践する、 地域に根ざしたIT教育

したテキストを見ると「フォルダの作り方」や「VS Codeのインストールの仕方」がスクリーンショット入りで丁寧に解説されていました。そして、シンプルなHTMLとJSのサンプルがそのまま載っていて、データ型などの説明もごく最小限に優しい言葉で書かれています。作るものは素のJSとHTMLで構成された簡単なクイズアプリ。まずはテキストどおりにクイズの機能を作成し、最終的には自分で作ったクイズに書き換えたり問題や選択肢を増やしていったりするという内容でした。

実際に集中講義の成果物発表の場でも、参加した学生は「クイズを考えること」自体に楽しさを覚えている、自分で工夫を凝らした問題をより楽しむための機能が追加されていました。発表の場はそれぞれのクイズに真剣に悩んだり、とても盛り上がりました。

つまり、筆者が「技術をどう教えるか」ということについてばかり注目していたのに対し、武山さんの教育プログラムは「楽しむためのツールとして技術がある」ということがメインになっていました。武山さんにこれまでに教育の場で辛かったときについて何うと真っ先に「うまくプログラミングの楽しさを伝えられなかったなと思ったとき」と話してくれました。まずは楽しめるように考えることが、最初の教育の場ではとても大事だと教えてもらいました。

### 学生一人一人と真剣に向き合う

「チラシを学校の掲示板上に貼っても駄目なんですよね」という言葉を聞いたのは、古山さんとコミュニティへの若年層の参加について相談したときのことです。イトナブが取り組む学生向けの活動では、直接ホームルームなどの機会に先生から学生全員にチラシを渡してもらうように頼んでいるそうです。掲示板上に貼ってあるくらいでは興味を持たず、学生にとって最も近い大人である先生たちの理解をしっかりと得ながら、その近い存在の大人から渡される内容でないと学生には響かない。加藤さんも集客をする際に学生に情報を届けるのがとてもたいへんだと話します。

その加藤さんに、東京からわざわざ故郷より遠い石巻にあるイトナブに惹かれた理由を聞くと「イトナブの大人が本気で遊びながら学生に向き合ったり、第一線で活躍しているエンジニアと近い距離で学べたりしたところに惹かれました」と答えてくれました。そのためアフターフォローについてもよく考えられていて、講座に参加した人が入れるSlackチームには、筆者やイトナブの講師、そして第一線で活躍する地域のエンジニアたちが参加しています。講義が終わったあとも地域のエンジニアと気軽にコミュニケーションができる環境を用意することで、その熱を失わずつながり維持していく。本当の意味でその地域に根づいたコミュニティを作ろうとしているところにも、イトナブのノウハウとその熱意が伝わってきます。

### 全国の地域で プログラミング教育の場を

イトナブでは神奈川県横須賀市、岩手県滝沢市でもプログラミング教育を広める活動を行っており(写真1)、郡山で始まったナブかつLABはこれから山形県山形市、宮城県大崎市、山口県周南市で展開していく予定とのことでした。

イトナブの培ってきたプログラミング教育のノウハウとともに「楽しさ」を広め地域のIT教育の場を育てていく、そんな活動にみなさんも加わってみてはいかがでしょうか？ SD

▼写真1 2019年12月に行われたナブかつLABの集中講義 [ITBootCamp]

